

# 2010 年度学校評価に関する外部評価報告書

関西大学第一高等学校・第一中学校、関西大学北陽高等学校・北陽中学校、  
関西大学高等部・中等部、関西大学初等部、関西大学幼稚園



2011 年 7 月

学校法人関西大学 外部評価委員会

## はじめに

3年目を迎えた「学校評価に関する外部評価」についてご報告できること、関係いただいた先生方に厚く感謝申し上げます。本年も併設校の校長・園長をはじめ、先生方の協力で、かなり深く突っ込んだ評価を実施することができました。加えて、4名の外部評価委員の先生方にはご多忙の中、各併設校のアンケート内容とその分析に限なくお目通しいただき、過分な評価をいただきました。まずもって厚く御礼申し上げます。

年を経るごとに、経験を積み重ねるごとに、自己点検・評価内容に工夫が加わり、アンケートが意図する結果を正確に導いてくれるようになってきました。現時点での大テーマは「12年間一貫教育又は6年間一貫教育体制」がいかにか可視化できるかでしょう。随所に、委員からその下地はできつつあるが、一貫教育に関する諸課題が、いまだ明確でないとのこと指摘に真摯に耳を傾ける必要があるでしょう。

各併設校にあっては、教育計画により、年間の教育プログラムとその意図を示している点は高く評価されておりますが、生徒や保護者に十分認識され、軌道に乗っているかという点で厳しいご指摘をいただいております。教育計画そのものの評価は良くても、それを実行していく先生と生徒の意識がしっかりと結びつき、実行に移されているかという点では、学校全体での具体的教育計画に対する構成員の意識改革が求められているといえます。先生方の努力は多としながらも、全体としてご指摘を受ける内容を十分に分析し、その結果を一貫教育プログラムの中で解決する方策を考えなければ、根本的な改善はできないように思われます。とりわけ、学力面において、中学1年でよい生徒を確保しても、2年目で学力が低下するこの現象を解消しなければ、一貫教育のコンセプトも達成できないこととなります。本学は私立の学校であり、公立の学校にできないプログラムを工夫・実行できるのも私立のメリットであります。このメリットを最大限に生かしていくことで、教育計画や一貫教育の実現を達成できると考えられます。

関大北陽となって3年が経過し、ミューズキャンパスにおいても初等・中等・高等部も2年目になり教員組織も充実しました。それぞれその真価が問われる時期になっています。

各併設校の校長・園長からのコメントに見られるように、それぞれが現状の問題点について十分に認識されています。後は、構成員（先生、生徒、事務職員、ステークホルダー）が一丸となる以外に道はないでしょう。その中心に「一貫教育」があります。

校長・園長を先頭に各先生方が風通しを良くし、互いに切磋琢磨しつつ、学校全体のレベルアップに努めることが大事です。その一助としての自己点検・評価活動が十分に機能することを強く期待します。

2011年7月  
学校法人関西大学 外部評価委員会  
委員長 小西靖洋

## I 外部評価実施概要

### 1 評価日

2011年4月1日(金)

### 2 評価者

外部評価委員4名

### 3 評価対象

2010年度学校評価結果

## II 外部評価委員からの総評

評価者	A
-----	---

学校評価報告書を通じ、どの学校・園とも、それぞれの建学の理念、教育方針に依拠して、検証を重ねながら教育内容、教育条件の向上を図り、堅調な発展を遂げていることが理解できた。併設校の中には、「関西大学」を構成する学校ユニットに相応しい校風の醸成とそれを具現化する教育体制の確立の過程で苦悩する姿も垣間見られた。このために払われる努力は、中長期的に見れば、当該校の特色ある新たな校風の確立に道を開くものであるとともに、「関西大学」全体の活力と多様な発展の原動力となろう。

今回の学校評価で、併設校間の共通項目を設定したことは意義ある試みである。しかし、たとえ共通項目であっても、その解釈が、学校間で異なる場合があることを容認することが大切である(例えば生徒アンケートの「教員の資質・教育力」といった項目)。これを一義的に解釈し、機械的に全てに適用することで、各学校の活力ある発展が減殺されてはならない。

評価者	B
-----	---

北陽高等学校が完成年度を迎える一方、初等部及び中等部・高等部が開校し、法人全体が大いに活性化して、順調に発展していることが確認できる。大きな飛躍に向けての過渡期中、学校評価に関する法人全体の基本方針を明確に掲げ、自己点検・評価委員会の中に初等中等教育部門委員会を設置して、特色ある一貫教育を組織的に推進している点は、名門私学にふさわしい見識ある取組として高く評価できる。「12年一貫教育」という言葉が初等部及び中等部・高等部の報告書に見られ、上記部門委員会のもと、各種の意欲的な取組が推進されているが、その反面、「12年一貫教育」の枠外にある幼稚園と大学については、法人内における位置づけが相対的に曖昧になっている。充実した法人の豊かな教育的資源を最大限に活用するために、幼児教育と初等教育あるいは中等教育と高等(大学)教育の連携に関しても、明快な基本方針が示されることを期待する。

評価者	C
-----	---

今回の評価活動で、全保護者への対象拡大、生徒アンケートの実施、併設校間の共通評価項目の設定の3点が改善されたこと、並びに実施対象者別の結果比較がされたことは大いに評価される。特に、実施対象者別結果比較は、教員の自己評価と保護者・生徒の評価の間に「ずれ」を発見し、その原因や背景を分析することが可能となり、それによって学校改善が進むからである。

学校評価のもうひとつの側面は、年度当初に掲げた年間目標や計画の達成度を測ることによって、達成項目についてはより高い目標と計画を立案する、未達成項目については、その原因を分析して、課題を見つけ、解決していくことによって、当初目標と計画の達成を果たしていくという点である。

それ故、評価を踏まえた「校長の意見書」には、次年度へ向けての改善方策について記述されることが望ましい。その改善方策に基づいて、次年度へ向けた学年・分掌・教科のチーム目標と計画に関する議論が活発化し、教職員は課題意識を共有することが可能となるからである。

評価者	D
-----	---

昨年までの関西大学第一高等学校・第一中学校、関西大学北陽高等学校、関西大学幼稚園に加えて、本年は関西大学高等部・中等部と関西大学初等部が加わった。本年はまた、評価項目、評価対象者に進展がみられた。

これまでと同様、全体として、概ね良好な評価結果を得ていると思われる。ただ、建学の精神や教育の理念をどのように生徒に浸透させるかについては、とりわけ北陽高等学校、高等部・中等部・初等部では、重要な課題としてとらえる必要があると思われる。

今回私が指摘させていただいた項目の中には、教員・保護者・生徒の間で回答に差があるものが多くあった。さしせまった課題ではなくても、認識ギャップを埋める努力は必要とされるであろう。

新設校においては、教員組織がまだ安定しないこともあり、試行錯誤の部分があることは受け入れざるをえない。その上で、関西大学の一員としてふさわしい段階に早く到達するよう、ひきつづき一層の努力をされることを期待したい。

### Ⅲ 学校別 外部評価委員からの意見・提言

#### 1 関西大学第一高等学校・中学校

評価者	A
-----	---

『学校教育計画』の浸透度がそれほど高くないことを学校側は、問題にしているようであるが、数値を見る限り、さほど問題ではないように思える。とかく保護者は、生徒の在学期間の教育の中身など目先の事柄に関心を持ちがちである中、むしろ相当数の保護者が学校の教育方針や改善・改革の方向性に関心を抱いているように感じた。

「この学校に入学」してよかった、させてよかった、という生徒、保護者の意見が高率を維持

している点は重要である。さらにその比率を高める努力をされたい。

生徒のマナーについては、やや問題も見受けられるようである。この年代の若者は（大学生も含め）、ルールやマナーは破るためにある、と思いがちであり、人格の形成過程において、そうした時期を経ることにも意義があると考えられる。今回の「生徒アンケート」で、「マナー意識の高さ」に懐疑的意見の生徒が相当数いたことを考えると、「指導」を通じた意識向上もさることながら、生徒の内発的な努力を通じ「マナーを守ることの大切さ」を個々人に内省させる方途を模索することが大切であろう。

興味をそそり知的好奇心を喚起する授業が多いと感じている生徒の割合がやや低いのは、気がかりである。教育方針の一に、併設校としての特性を活かし、受験準備教育からのある程度の解放を掲げている以上、事物の本質を考えさせる知的探求型の授業を企画・実施することは、是非必要である。

評価者	B
-----	---

関西大学の併設校として、関西大学の建学の精神「正義を権力より護れ」を踏まえて、「正義を重んじ誠実を貫く教育」という高邁な教育方針を掲げている。本年度から「保護者対象評価アンケート」の対象を全保護者に拡大し、さらに、「生徒アンケート」を新たに開始して、自己点検・評価と情報公開にも積極的に取り組む姿勢は、「正義を重んじ誠実を貫く教育」という教育方針を進んで実践する姿勢を示したものであり、関西を代表する名門私学にふさわしい取組として高く評価できる。

学校運営に関しては、授業参観や成績懇談などの機会を利用して、その方針の周知に努めている点は、個性ある教育を追求する私立大学にふさわしい取組である。ただし、「学校教育計画」自体は、期待されていたほど保護者には読まれていないようなので、ホームページの活用などの一層の工夫が望まれる。なお、遅延している第一高等学校創立 100 周年記念事業準備に関しては、その遅延の理由及び今後の方針に関する報告を行うべきである。

教育内容・生徒支援に関しては、「知育・徳育・体育の高度に調和した人間教育をめざす」という見識ある教育目標を実現するため、行き届いた自己点検・評価活動が行なわれていると判断できる。学力不足の生徒に対する指導の改善が確認できる点は、公教育機関として高く評価できる。生徒支援に関しても、誠実な取組が多面的に実施されているが、生徒会活動の内容の認知度を向上させることによって、生徒の主体性を尊重しつつ、保護者や地域社会との連携をさらに密接なものとしながら、社会人としてのマナー意識を育成していくための方策がさらに必要である。

教員活動に関しては、新たに導入されたすべての科目における研修が大きな効果を挙げていることが確認できる。今後、適切な支援体制の整備にもさらに努めつつ、法人内諸学校を含めた学内外にその成果の情報発信を積極的に実施することが望まれる。

評価者	C
-----	---

まず、学校に対する保護者や生徒の満足度が圧倒的に高く、学校への関心も高い。この点は本校の財産である。次に、「学校教育計画」の浸透については、冊子が読まれているかどうかより内容が浸透しているかどうか（教員版）、つまり、学校が今年度は何に力点を置いて教育に臨んでいるかを保護者と共有することが教育効果を上げる上でも重要である。

次に、知育について。「学校は基礎学力向上のために取り組んでいるか」に対して教員も保護者も評価が高いのに対し、高校生の評価が低い。学力面での生徒の不安にどう応えるかについて改善が求められる。「昼休みや放課後の質問受付や補習について」中学生保護者の評価が低い点も同様である。

次に、徳育面では、マナーやモラルの向上に対する取組は教員も保護者も評価が高いのに対して、当事者の生徒自身は評価が低い。学校外での生徒の行動について生徒自身の自覚的行動を育てる教育が求められる。その点では、授業や部活動での自立を促す指導や生徒会の環境を守る活動などについて生徒の評価が教員の評価に比べて低いこととも関係していると思われる。地域社会に如何に支持され評価されるように日常的に学校生活を送り、活動を行うか、その中で生徒自身に社会の一員としての自覚を持たせるかということと連動すると思われる。

研修や大学との連携については、概ね教員の努力が保護者にも評価されているし、大学との連携も意識されている。ただ、授業のあり方については、教員の自己評価が高いにもかかわらず、生徒の評価が低いことを考えると、如何に学校側の努力を形にして生徒や保護者に発信し、生徒の満足度を高めるかが問われる。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・第一中学校においては、学校生活についての生徒の満足度は高く、概ね良好な評価を得ているといえる。ここでは、資料7にもとづき、教員・保護者・生徒の間でアンケートへの回答に著しい差異がある項目に着目した。これらは、自己評価書で分析されていることと重複する点も多くあることをお断りしておく。

情報公開に関連して、HPについては、教員・保護者に高く評価される一方で、生徒はほとんどこれを見ていないと回答している。それ自体は教育にとって致命的なことではないが、教育現場でHP活用の意義を理解させることを試みるのがいいと考えられる。

危機管理も教員・保護者と生徒とでは回答が大きく異なっている。危機管理の重要性に鑑み、さらに徹底させるよう期待する。

知育面では、基礎学力向上のための組織的取組やスタディサポートなどで保護者の評価が高いのに対して、生徒の評価は低い。同じことは、社会規範の理解とモラルの醸成についてもいえる。スローラーナーへの対応は、教員の評価が高いのに対し、保護者・生徒の評価が低い。ボランティア活動やカウンセリング体制、教員研修についても同様である。これらは教育面での重要項目であるから、その理由と対応策を検討し、よりよい教育につなげてほしい。

教育目標、教育指針、重点項目が定められていることは評価される。また、引き続き「キャリア教育の実施」を教育指針として掲げ、①関西大学との連携強化と、②産・公・学との実践的連携の推進を重点項目としている。自己評価書ではこの点についてほとんど分析されていない。前者①はアンケートに含まれているが、後者②は含まれていない。教育指針をアンケートでどう問うかについて工夫が求められよう。なお、建学の理念に直接結びつく教育目標・教育指針が生徒によく理解されていないことは私学の生命線であるので、深刻に受けとめるべきである。

## 2 関西大学北陽高等学校・北陽中学校

評価者	A
-----	---

今回新たな手法で「アンケート」を実施したことに伴い、従来の課題がより深刻化し、また新たな課題も見えてきたことに対する危機感が如実に示された学校評価報告書となっている。

数値の上に現われた「課題」を当校自身、解決を必要とする「問題」であることを明確に認識できていることは、当校の今後の飛躍・発展の糧となるもので、一定の評価に値する。

さて、「社会規範の理解とモラルの醸成」、「健康な体づくり」、「指導方針の一貫性」などの項目で、教員と保護者の評価が背反した状況にある（「社会規範の醸成とモラルの醸成」に至っては、生徒たちまで、そのための教育的配慮が十全に行われていると感じている）。その一方、進学等を見据えた補習的な教育、保護者との連携について、保護者の評価は高いとは言えず、「教員の資質・教育力」に対する生徒の評価もかなり厳しいものがある。総じて、教育内容に関する項目において、社会規範・モラルの指導を除けば、学生たちは、教育指導が不十分であると感じている。私は、併設校として、再発足した当校が、「関西大学」の教育理念と、旧来の学校法人の「建学の理念」のはざままで葛藤している姿をここにみることができていると感じている。

ところで、生徒の多くは「学校生活は楽しい」と感じており、部活支援への満足度も高い。

学校評価報告書は、旧来の建学の理念が投影された「現象」をある種の「弊」として捉え、これがある意味において「システムティック」に改変する方向を模索しているようにも読み取れる。しかし、今回の数値結果に過敏に反応し、これまで培ってきた伝統を一掃することは、当校の潜在的活力を削ぎ去ることにもなりかねず、慎重な対処が望まれる。もとより、数値上きわめて厳しい結果が示された項目については、その具体的な中身を把握し、原因究明に努める必要があることは言うまでもない。

評価者	B
-----	---

関西大学の併設校として、2010年度で3年目を迎えた。すべての生徒が合併以後に入学した生徒になり、関西大学北陽高等学校の「完成年度」である本年度の最大の課題が「関西大学への内部進学」であることを明確に自覚し、「関大連携コース」を中心にした「コース制」の入念な自己点検・評価を行っている点は、生徒のニーズに応える適切な取組として高く評価できる。その反面、本年度開設された関西大学北陽中学校に関する分析等は、相対的に不足している。満足度の高い中学校の保護者の期待を裏切らないように、関西を代表する名門私学の併設校にふさわしい中高一貫教育に関する魅力的なミッションとビジョンをすみやかに策定することが大いに期待される。

学校運営に関しては、自己点検・評価を誠実に実施して、厳しい結果にも建設的な態度で臨んでいる。「教育方針・教育目標」及び「合併の精神」に関する評価が全般に低下している点は、中高一貫教育のミッションとビジョンが周知されていないことを示唆しており、早急な改善が必要である。「教員と職員との連携」の評価が高く、適切かつ明確な到達目標さえ共有できれば、その実現に向かって組織的な取組を推進する土台は確立しているので、今後の成果に期待したい。

教育内容に関しても、「知徳体の調和した人間教育」という見識ある教育目標の実現を追求する堅実な姿勢は、高く評価できる。関西大学への内部進学に対する期待と不安が保護者の中にあ

ることを踏まえて、「組織の中における学習指導のシステム化を図る」という新規目標の達成に全力を注ぐべきである。

生徒指導・生徒支援に関しても、適切な自己点検・評価が実施されている。「進路指導体制」などに関する評価が低迷している原因をさらに詳細に分析し、生徒指導に関する本校の豊かな実績を組織的に発展させる具体的な方策をすみやかに検討することが強く求められている。

評価者	C
-----	---

本自己評価の分析は具体的でリアリティーが感じられる明解なものとなっている。厳しい評価結果にも目をそむけず向き合おうとされている姿勢には大いに感銘を受ける。さて、今年度は関大北陽の「完成年度」であり、同中学校の開設年度であるが、3年間の経緯の中で、「産みの苦しみ」とも言うべき時期ではないだろうか。それは、教員の自己評価がこの3年間で最も低く、特に学校運営に関わる項目が低い評価となっている。保護者についても、関大北陽になってから厳しくなっており、特に家庭との連携や教員の資質等について低い。一方、新設された中学校の保護者の評価は保護者との連携等でやや低いとはいえ、その割合は高校に比べて小さく、満足度は高い。この点は、関大北陽になってからの高校保護者の求めるものが高くなった分だけ学校への評価も厳しく、新設された中学校に対しては今後への期待が込められて満足度の高いものになっているのではないかと考えられる。

一方、生徒については、評価が保護者に比べより一層厳しくなっている。「学校は楽しい」と概ね評価しているが、教員とのコミュニケーションなどにおける満足度が高くないのは、注意すべき課題であろう。とりわけ、Ⅲ類の生徒の評価が軒並み低くなっているのは、スポーツコースの生徒の評価の高さと比較して、学校に向かう意識が定まりきれていないとも考えられる。何を目標にして学校生活を送るかについて、生徒の意識を高める取組が求められる。学校運営については、「教育方針・教育目標」が教員と高校生において極めて低い点は、新しい学校が何を目標そうとしているのか、そのためにどのような活動に力を入れていくのか、生徒には何を求めるのかなどについて、教員が一丸となって語っていくような発信力の強さが課題であろう。

評価者	D
-----	---

関西大学北陽高等学校は、本年が合併後の完成年度にあたり、中学校は開設年度であった。こうした慌ただしい状況では、教育現場はさまざまな困難に直面しつつ教育を充実させなければならないという重荷を負っている。またそれだけに、評価が厳しくなるであろうことも想像できる。

評価結果を総じてみれば、保護者の評価が比較的高いのに対して、生徒はきびしい評価を下しており、教員による評価は前年より悪くなっているといえる。

今回はすでに自己評価書で指摘されていることと重複する事項も多いが、下記の点を指摘させていただく。対応策が提示されるよう期待する。

- ①教員対象アンケートでは、私学の独自性、教員間連携など学校運営の項目で年々評価が悪化しているのが気になる（唯一の例外が教員と事務職員との連携である）。また、生徒指導、教員の研修活動でも悪化傾向がみられる。これらは実態が本当に悪いのかアンケートの制約の故なのかを含めて原因を検討し、対応を図ることが肝要である。

- ②保護者対象アンケートでは、経年比較（高校）でも、中・高比較でも概して大きな差異はないといえる。その中で、保護者との連携や進路指導では高校の保護者の評価がやや低い。進学を前に、こうした点に敏感になるのだと思われる。これについてはどう対応するかを検討が必要である。
- ③生徒対象アンケートでほとんどの項目で保護者より低くなっている。生徒は全体としての学校生活についての満足度が低くはないにも関わらず、多くの項目について厳しい評価をしている。これをどう考えるかは重要な課題である。
- ④教員・保護者・生徒の回答で差異が大きいものについては、検討が必要である。学校生活の満足度は保護者が生徒より高い評価をしている。それだけではなく、生徒は教育方針・教育目標で低い評価をだしている。中高大連携事業の実践や生徒指導の連携などでは、保護者が高く、生徒は低くという図式があてはまる。対応策を検討することが肝要である。

### 3 関西大学高等部・中等部

評価者	A
-----	---

「ゼロからの学校づくりであったが、何とか1年目は合格点が得られた」(まとめ)の言葉通り、数値の上から見る限り良好な結果が示されているといえる。学校生活全般に関する満足度に加え、当校へ入学して(させて)よかったと感じている生徒、保護者の比率が高いことが、このことを端的に物語っている。

その一方で、アンケートの結果上、当校の特色や強みが十分発揮できていないことは、今後の課題である。関大進学モチベーションを高めることは、生徒獲得(大学から見れば将来の学生獲得)の観点からだけではなく、「関西大学」という学園のアイデンティティの確立に貢献し、学園全体が育成を目指す人材の模範的な「供給源」としての役割を十二分に果たしていく上で重要である。また、後期中等教育段階の生徒の知的好奇心を高めていく上でも、関大との教育連携は不可欠である。

なお、学校評価報告書には、「授業レベルをどこに定めるかが喫緊の課題」である旨の記述が見られる。一般論から言うと、それは、建学の精神や教育方針を基礎に導出されるべきである。しかし実際は、教育現場において、生徒に対する日々の学力判定の積み重ねの中から、導き出されることになるのであろう。そうした営為を試行錯誤する中で、当校の教育力に対する保護者や生徒の評価も、今後変動することが予想されなくもないが、目先の(アンケートの)数値の推移に一喜一憂することなく、草創期の学校ならではの斬新な試行実践の展開を切に望みたい。

評価者	B
-----	---

本年度開校を迎えた新設校であるが、法人の方針に忠実に従って、4月の職員会議において自己点検・評価活動の実施母体を校務運営委員会と定め、実情に合わせた段階的計画を立て、すみやかに学校評価を組織的に実施していることは、明確な意思決定プロセスに基づくマネジメントシステムの確立に向けての健全な取組として高く評価できる。本年度の実施を見送った教員個人による自己点検・評価についても、教員配置が整備された段階に備えて、その実施計画をすみや

かに策定することが期待される。学校評価報告書を踏まえた校長の意見書も適切なものであるが、今後は、さらに具体的な課題を明示することが望まれる。

学校運営に関しては、建学の精神や教育目標の周知が行き届いており、おおむね健全に実施されている。教員体制がまだ整備されていない段階にあるので、会議の効率的な運営などにさらに工夫を重ねて、教員の負担を最小限に抑える組織的努力が不可欠である。初等部のように、「年度目標」や「重点目標」を組織的に決定して、校長の明快なリーダーシップのもと、現実的かつ弾力的な課題解決策を積極的に検討する必要がある。また、学校運営には、保護者の理解と協力も不可欠であるので、ホームページの効果的な活用方策なども検討することが望まれる。

教育内容に関しても、多面的に誠実な努力が続けられている。なかでも、生徒指導及び生活指導については、アンケートにおいても高い評価を得ており、「走りながら考える」ことを余儀なくされる開校初年度においても、生徒とのコミュニケーションを最優先する教育的姿勢が誠実に守られていることが確認できる。「学校間連携」や「教員の研修体制」は、まだ本格的な実施に至っていないようだが、一貫教育の実質化のための基盤になる取組になるので、早急に具体策を検討する必要がある。今後の成果に期待したい。

評価者	C
-----	---

開校1年目であるが故、学校評価も過渡的であることはやむを得ない。とりわけ、教育の質を評価によって高めていくことを考えると、早急に保護者評価の対象を拡大することが新設校づくりの上でも有効と思われる。本校は全国から集まったポテンシャルの高い教員集団で組織されている。「走りながら考える」状況のもとで人数も少なく新設期特有の多忙さにもかかわらず、管理職や事務職員と教員との相互理解や信頼関係がよりよく築かれていることはおおいに評価される。しかし、その多忙さが余裕のなさにつながると、会議の効率性や生徒や保護者への情報提供のきめ細かさ、情報管理、地域連携、中高大連携、校内研修などの項目でのマイナス評価の多さが示すように学校づくりのほころびとなってくる危惧がある。その点から、組織運営の効率化や意思一致や情報の共有などの一層の改善が図られることを期待したい。

また、生徒の評価であるが、学力向上の組織的な取組については、「授業を通じて学力がついているか（高校）」、「模擬試験後の面談で学力分析ができていないか（中学）」、「入学前より生活習慣に自律性が高まったか（高校）」、「先生とのコミュニケーション（中高）」、「関大に関する情報が増え大学進学モチベーションが上がった（中高）」、「専門的な学習の面白さを感じる（中高）」などでマイナス評価を下している生徒が比較的多いことは、あえて緊張感を持って受け止めておきたい。新しい学校に生徒たちは夢と希望を持って入学してきている。その期待や夢が大きいほど、現実に対する評価は厳しくなる。学校としては、「開校1年目で走りながら考える」というやむを得ない事情があるのは十分理解できるが、生徒たちにはなかなか通じ難い。そのギャップをどのようにして埋めていくかが今後の学校づくりの課題であろう。

評価者	D
-----	---

関西大学高等部・中等部の学校評価（自己評価）分析は、今回初めて実施された。そのため部分的な評価にとどまらざるをえないなど、初回ゆえの制約があるのはよく理解できる。以下、気づいた点のうちいくつかを記述する。

- ①「私学の独自性」に関する回答をめぐり、まずまずの評価とする評価書の分析と、私の分析は異なる。特に「建学の精神、教育方針を理解している」という項目では、保護者は100%が肯定的に回答しているのに対して、生徒はA・B合わせて63%にとどまっている。私学にとってこの点は生命線というのが私の認識であり、関西大学の高等部・中学部としての存在価値にかかわるものであると考えるので、さらなる改善が期待される。
- ②学校運営については、いくつかの項目で課題を抱えていることが示された。評価書はこのことを認識しており、改善策をとるとしている。ただ、特に校内における教員研修は評価が極端に低い。評価書の「2. 今年度の教育活動状況」に記載されているように、少ない教員で初年度のもろもろの業務をこなさなければならなかったことの結果と理解する。できるだけ早く解消されることを期待する。
- ③教育内容について、評価が芳しくない項目について評価書ではきちんと分析がなされ、対応することが示唆されている。特に教員が危機管理について厳しい評価をしていることに対して早急に対応することがのぞまれる。この点も含めて、来年はよりよい評価につながることを期待する。
- ④学校間連携において、保護者と教員・生徒の回答に差異が大きいことは気になることである。このギャップをどう埋めるかを検討していただきたい。

校長の意見書に表現されているように、開校初年度であり、教職員が全国から集まっている中での学校運営であり、教育である。異なる教育文化を背景に持つ教職員が一丸となって関西大学高等部・中等部づくりに邁進されるよう、期待する。

#### 4 関西大学初等部

評価者	A
-----	---

「全体としては予定していた活動、内容が実施でき、今年度の教育課程はほぼ満足できる」という所見は、数値の上からもほぼ裏付けられる。積極評価の比率の低い項目も見られるが、それらは、いずれも人的体制が整うことに伴って解決できる課題であると考えられる。

「児童に先輩がいないことによる校風、学校文化の無さ」についても、在籍児童は開学時に編入学、入学してきた子どもたちであることから、年齢は低いとはいえ、当校の礎を精神面から築き上げるパイオニアとしての自覚が自然と培われつつあると考えられる。こうしたことから、児童の通学範囲が広いことや、全国から参集した教員の下で教育上の営為がなされていることなども相俟って、在籍児童の強いイニシアティブの下、個々の児童の自律性に支えられた新鮮で自由な校風が醸成されることへの期待は大きいといえる。

個々の児童の学力差が大きいことについては、今後、どのような受け入れ方針の基に、いかなるレベルの児童を受け入れるのか、さらには日々の教育実践の中でどの程度の学力レベルを念頭に置いて、児童への教育指導を行うのか、引き続き慎重に議論していくことが必要と考える。中等部との接続をスムーズに行える一貫教育のための教育システムを万全なものとして構築・運用していくためにも、このことは避けては通れない課題である。

評価者	B
-----	---

本年度開校した新設校であるが、「年度目標」と「重点目標」を明快に定めた上で、意欲的な自己点検・評価活動を実施し、P D C Aサイクルを意識した学校評価システムの確立に取り組んでいる点は、豊かな将来性を有する新設校として高く評価できる。12項目にわたる「重点目標」は、どれも不可欠なものであることは理解できるが、若干総花的な印象もあるので、来年度からは、優先順位を検討して、もう少し精選するほうが保護者や教職員にわかりやすいであろう。本校の教育理念を冒頭でわかりやすく説明し、それに照らして、「年度目標」と「重点目標」の適切性も評価対象とすれば、学校評価としてさらに精度の高いものになる。学校評価報告書に基づいて、3点の努力目標を明快に述べた校長の意見書も見識あるものと判断できる。

学校運営に関しては、完成年度をまだ迎えていないので、過渡的な段階ではあるが、保護者との信頼関係の確立を重視しながら、今後の一貫教育の展開を見据えた健全な取組が多面的に実施されている。なかでも、全教科のシラバスを作成していることは、初等教育の教育課程の整備に向けての模範的な取組として高く評価できる。

教育内容・児童支援に関しても、全般に見識ある取組が行われている。英語教育や国際教育に対する保護者の満足度は高く、特色ある教育を推進する誠実な活動が行われていることが確認できる。今後の具体的な成果公表に向けて、さらに組織的な努力を続けることが期待される。また、体育祭や文化祭の初・中・高3校合同開催は、一貫教育の実質化に向けての効果的な学校連携推進の方策であるので、運営面での工夫を重ねながら、今後も継続することが望まれる。

教員研修も計画的かつ積極的に実施されている。次年度には教員数も増えるので、建学の精神の共有と帰属意識の育成なども明確に目標に掲げて、今後も恒常的な取組が実施されることが望まれる。

評価者	C
-----	---

関西大学初等部は、中等部・高等部と同様、開設1年目であるため、評価も過渡的である。対象も教員のみで、母数も11名と僅少である。それ故、割合を示す数字の重みは比較的軽いと見ておかなければならない。今後、教員も一定数が揃い、保護者の評価参加も図られた段階で、評価の精度もより一層高まるものと思われる。

さて、今回の評価結果の分析であるが、教育方針・教育目標の浸透、事務職員との連携、家庭との連携、授業等の公開、初期対応や登下校対策・情報管理、学習習慣の定着指導、読書指導、I C T環境への親しみ、放課後活動、校内における研修の項目は大変高い評価になっている。これらの結果から見てとれることは、中・高等部と同様に、全国から集まっているが故の指導方法や習慣などの学校文化の違いを超えて、教職員が一致して新しい学校の創造への意欲が感じられる。

しかし、他方では、1年目であるが故の困難も課題として浮かび上がってきている。それは、教員間連携、会議の有効性、基本的な生活習慣やいじめ・不登校対策、特別支援に係る個別指導、食育指導などの項目においてマイナス評価が多い。教員の中には、新しい学校への児童・保護者や社会の期待に応えたいという情熱を持って日々教育活動にまい進しているが、公立学校や他の私立学校とは異なる特色や有為性を何によって示すのか、またそれを為し得る組織としての活動はどうあるべきかについて、これまでの所属校での経験との違いもあって、これでいいのだろうか

かという不安や迷いも付いて回る。それ故のマイナス評価の多さではないだろうか。自己評価にも書かれていたように、その違いや迷いを教職員の意欲と熱意で越えていく日常的な組織運営が求められる。

評価者	D
-----	---

関西大学初等部として最初の学校評価（自己評価）であった。完成年度にはまだしばらくあり、教員も生徒も全陣容がそろわない中での教育の始まりに多くの困難があったであろうことは容易に想像できる。また、それがゆえに、学校評価も完全な形ではできなかつたが、その点も理解できるところである。

今回の評価は教員アンケートだけにもとづくものであるから、深く分析することはできないと思われる。多くの項目で高い評価がえられているが、いくつかの項目では評価が低くなっている。ひとつの基準として33%以上の教員がCまたはDと回答した項目を取り上げてみると、以下の項目が該当する。まず「学校運営」では、教育計画、教員間連携、会議の有効性、HPの活用が該当する。次に「教育内容」では、基本的な生活習慣、いじめ・不登校対策、食育指導、中・高等部との連携が該当する。最後に「教員の研修活動」では、校内における研修活動が該当する。

評価書には「2. 今年度の教育活動状況」が提示されている。そこには4つの年度目標と12の重点目標が掲げられている。そのことはすぐれた教育を行う上で重要であるが、それと「3. 評価結果の分析」との関係が評価書では明示されていない。簡潔にでもそれが示されれば、外部評価者にとっては、重点項目と評価分析の内容をよりよく理解できると思う。

そのこととの関係で言うならば、校長の意見書に「12項目の内容の一層の充実」に取り組むと述べられ、特に「中等部との強化連携」「学校行事の充実」「生徒指導の充実」が掲げられているが、それが評価分析の結果にどのように基づいているかが明確でないという印象をうけた。例えば、分析でも指摘されている教員間連携をどうするかにはふれられていない。なかなか難しい点であろうと思うが、ひと工夫をお願いしたい。

## 5 関西大学幼稚園

評価者	A
-----	---

これまで同様、今回の学校評価報告書も、克明に事実関係を把握した上で、教育内容、教育条件の質の向上を模索しようという視点から作られており、評価に値する。こうした視点からなされた評価結果を、当園の全構成員が共通認識として共有し、教育的営為の一層の充実につなげようとする姿勢は、同報告書「まとめ」の記述からも窺われる。

そして、「給食・弁当」、「通園」、「子育て支援」、「施設・設備」についての詳細な記述を通して、すでに現時点において、自立性に支えられた伸びやかな成長を促すようきめ細かで温かい教育的営為が展開されていることが確認できた。

ところで、「教育相談」に関するアンケート結果を見ると、教育相談への需要がさほど高くはなく、それに呼応するかのようには、教育相談そのものが「停滞」している観がある。このことは裏を返せば、子どもの教育環境、生活環境が良好であることの証左でもあり、胸をなでおろしたい

気にもなる。とは言え、本報告書自身、保護者の悩み・不安に「担任は気づけているのか」、「保護者が担任に思いを話せる関係が築けているのか」と自戒していることから、こうした観点から、園内での一人ひとりの子どもの様子を観察する中で、教育相談の在り方について組織的に検討することも大切と考える。

なお、「関西大学初等部との接続」の問題に関しては、当園自身、その推進に積極的なのかどうか、外部評価委員にとって理解しづらいところがある。教員アンケートでは、「幼稚園を含めた一貫教育」の必要性について、これに消極的な意見が大半を占めている。通学距離問題という障壁があることもさることながら、教員の側からしてみれば、「学び」の初期段階にある子どもに対し、早期のうちに進路選択を強いることへの戸惑いもあるのであろう。園内部で、さらに慎重に検討していくべき課題であると考ええる。

評価者	B
-----	---

豊かな実績を有する幼稚園にふさわしく、見識ある保育の基本方針に基づいて、誠実な努力が行われている。客観的な成果測定が難しい幼児教育であるが、学校法人の方針に従って、2008年度から積極的な自己点検・評価活動を実施していることは、他の幼稚園の模範となる試みとして高く評価できる。なかでも、教員に加えて、全保護者へのアンケートも行って、教員の資質の向上に努めつつ、保護者との連携を組織的に推進している点は、今後の成果が大いに期待できる。

自己点検・評価の方針として、年度ごとに具体的な評価項目を設定したことは、現実的な方策として一定の評価ができる。本年度は、①給食・弁当について、②通園について、③子育て支援について、④関西大学初等部との接続について、⑤施設・設備についての5項目を中心に、誠実な自己点検・評価が実施されている。④関西初等部との接続に関しては、地理的な問題もあり、保護者の関心もまだあまり高くないが、今後の一貫教育の発展のために、「初等中等教育部門委員会」との連携も強化しながら、積極的な広報活動などを行うことが必要である。

自己点検・評価の手法として、今年度は具体的な5項目について、詳細な分析がなされているが、その5項目が選ばれた理由に関しても、簡潔な説明が必要である。危機管理のように、恒常的に自己点検・評価すべき項目もあるであろう。報告書の内容は、依然として「現状の説明」とアンケート分析が中心になっているが、自己点検・評価活動は、PDCAサイクルに基づくマネジメントシステムを確立することにあるので、まず、全体の理念及び教育方針等を説明した上で、項目ごとの到達目標と課題及び改善計画などをさらに明確にする努力が期待される。教育対象が低年齢である幼稚園の「学校評価」の先駆的なモデルを広く発信することを目的として、今後も努力を続けることが強く期待される。

評価者	C
-----	---

本幼稚園の評価実施は目覚ましく進展した。全保護者と教員を対象として、保護者からの有効回答は92%近い。日常的な保護者との望ましい関係なしには達成できない。その努力に敬意を表したい。

さて、その評価結果であるが主な項目について概観しておきたい。まず、給食・弁当については、給食献立の満足度、食育の意義理解の評価が大変高いものとなっているのは、配膳形式の採用や野菜・胚芽米による栄養管理など、広く食育や心身の発達などを考慮した工夫の成果である

う。今後とも保護者意識への働きかけについて問題意識を教員全体が共有できるかは重要である。また、通園バスによらない通園方法については、教育的意義が伝わっていると回答した保護者は61%強であり、それ以外の保護者への意義の浸透は子どもの安全やマナー・ルールの指導に不可欠であるが故に、この点も保護者への働きかけの工夫の具体化が求められる。

子育て支援については、一般的な「預かり保育」とは異なる「希望（のぞみ）クラス」の取組がされているが、これは子ども同士の異年齢関係づくりや帰宅後遊び場所がない子どもの生活リズムの確立を重視した取組であり、保護者の満足度も意義理解も高い。また、2歳児親子教室については、子ども担当教員と保護者担当教員の2人3脚で行われている入園前（就学前）教育となっているし、保護者に対する子育て相談支援事業にもなっている。さらに、大学の心理学専門家や園長による教育相談は「親育ち」にもつながる有意義な取組であり、今後一層の有効な活用が望まれる。

関西大学初等部との接続については、地理的問題もあるが、単なる受験対策ではなく、教育面での接続の有効性とその方法について研究開発されることを期待したい。

評価者	D
-----	---

関西大学幼稚園の評価報告書を読むと、保護者の満足度も概して高く、さすがに創立60周年の伝統が生かされていると感じられた。私は昨年の評価書で、評価項目のうち、①給食・弁当・通園について、②子育て支援について、③小学校との接続について、④周年記念行事について、さらには⑤点検項目とするかどうか検討する項目について評価報告書で触れられていないので、なんらかの記述を行うことが望まれる、と記載した。本年の評価書では、これらの項目のほとんどを取り上げていただいた。以下、いくつかの点について述べる。

- ①「給食・弁当について」のうち、食育に関する保護者と教員の認識ギャップは、評価書においても指摘されているとおりに、気になるところである。この点について取り組むことが示されているので、来年には改善がみられることを期待する。
- ②「希望（のぞみ）クラスについて」のうち、希望クラスの在り方は子育て支援のために有効かに関する認識では、教員は全員がAかBとしているのに対して、保護者は30%以上がCかDと回答し、無記入も他の質問事項より多い。この点について今回の評価書ではふれられていないが、分析しておくことが望まれる。
- ③「関西大学初等部との連携について」では、初等部との連携に積極的な回答は少なかった。幼稚園児の通園可能圏を考慮すると、私はこの点は懸念材料にはならないと認識している。
- ④「施設・設備について」で指摘されているように、安全への配慮に関する保護者の評価と教員の評価がわかれている。安全が重要なのは幼稚園に限らないが幼稚園では特に重要であるので、今回示された対応策が確実に実行されることを期待する。

本年の評価書は項目を絞り込んでいる。評価書の最後に指摘されているように、「年度ごとに細部に観点をあてた項目を設定し」保育の改善に資するのは、一つの有効な行き方かもしれない。

## IV 外部評価を受けての学校の所見・改善策等

### 【全体について】

2010年度学校評価に関する外部評価委員からの総評において、委員の一人から、「充実した法人の豊かな教育的資源を最大限に活用するために、幼児教育と初等教育あるいは中等教育と高等（大学）教育の連携に関しても、明快な基本方針が示されることを期待する」とのご指摘があった。至当なご批評であると受け止めている。

2010年4月に初等部を開設したことにより、本学では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、大学院までの一貫教育体制がようやくにして整った。2009年10月に策定された長期行動計画においても、「総合学園としての特長を十分に活かすことを基本とし、大学のリソースを活用するとともに、大学までの一貫教育を機軸に据え、『考動する関大人』の育成をめざす」旨謳われているところである。2010年4月には、「学校法人関西大学が設置する高等学校、中学校、小学校及び幼稚園と大学間の一貫教育を推進するとともに、その充実を図る」ことを目的として「関西大学一貫教育協議会」を設置したので、同協議会での議論を経て、本学における一貫教育の基本的な理念や方針を成文化し、広く社会に開示していくこととしたい。

なお、現在、政府においては2013年度からの実施を目指し、幼保一体化に向けた検討が進められている。幼児教育、保育及び子育て支援事業の3つを提供する施設として新たに「こども園」を設置するとともに、私立幼稚園への私学助成と私立保育所への保育所運営費を廃し、幼保一体給付に一本化する方向のようであるが、現時点ではまだ制度の全容が明らかになっていない。そこで本学では、常任理事会のもとに「幼稚園問題検討プロジェクト」を設置し、幼保一体化の動向や園舎の老朽化も念頭に置きながら、今後の幼稚園のあり方について改めて検討し、常任理事会に提案することになっている。

したがって、本学における一貫教育の理念や方針の策定にあたっては、こうした幼稚園を取り巻く大きな環境変化も視野に入れて検討する必要があると考えている。

## 【各校・園の個別事項について】

### 1 関西大学第一高等学校・第一中学校【学校長名 橋本 定樹】

3年目を迎えた学校評価(自己点検)は、全保護者対象アンケートや高3生徒対象アンケート、そして併設校共通評価項目など新しい取組が加えられた。その結果を踏まえ、外部評価委員から多くのご指摘をいただいた。ここでは多岐にわたる課題の中で、いくつか共通するものについて、所見および改善策を述べることにする。そのほかの課題については、各教科・部会でさらに検討し具体策の提示につなげていきたい。

#### (1) 学校教育計画の浸透について

「入学して良かった、させて良かった」という生徒・保護者の意見が高率なのに対して、「学校教育計画の浸透率は約70%(保護者)」、「教育方針・教育目標の理解率は約50%(生徒)」と低迷している点を関連させない方が良いのかもしれないが、『生徒の結果は深刻に受け止めるべきである』(評価者D)とのご指摘を受けた。「学校教育計画」を保護者・生徒に浸透させるためにも、教育方針・教育目標や重点項目などの大切な部分の抜き刷りを成績懇談会で配付したり、ホームページに載せるなどの取組を行いたい。

#### (2) ホームページの活用について

トップページでは、学校行事の活動報告をトピックスとして配信しているほか、部活動の実績・入試説明会やオープンキャンパスの告知等、どちらかという受験生や保護者向けの内容が多い。本校ホームページは、同報メールと合わせて緊急連絡方法の一つとして大いに活用されている。他校ホームページにあるようなパスワードを要求される内容に関する各種の案内・告知は、むしろ、学級担任からの説明とともに配付されるプリントに集約されている。

ホームページに掲載する手続きに工夫が必要であるが、生徒を参加させる取組を盛り込み、生徒会活動の内容の認知度を向上させる機会や教育活動の成果の情報発信の一つとして、ホームページを活用していきたい。

#### (3) マナー意識やモラルの向上について

一週間の授業の中で、中学校では「特別活動」と「道徳」の2時間があり、高校では「ホームルーム(HR)」の1時間がある。キャリア学習や人権学習など連続する特別プログラムもあり、マナー意識やモラル向上に努めている。また、本校独自の学校行事が多く、その準備や練習、あるいは事前事後の学習を活用して、集団活動での協調性や自主的・自立的な態度を養っている。しかしながら、教員や保護者に対して生徒の評価が低い点については、『「指導」を通じた意識向上もさることながら、生徒の内発的な努力を通じ「マナーを守ることの大切さ」を…』(評価者A)、『生徒の主体性を尊重しつつ、保護者や地域社会との連携をさらに密接なものとしながら、社会人としてのマナー意識を育成して…』(評価者B)、そして、『生徒自身に社会の一員として自覚を持たせるかということと連動する』(評価者C)というご指摘をいただいた。電車内マナーなどで、一般の方のお叱りを受けてからの受け身的な「指導」ではなく、常日ごろの枠組みの中で、生徒個々に「気づ

かせる」ためのプログラムを模索したい。

(4) 教員活動について

新たに導入された授業力向上のための教科ごとの研修を継続・発展させ、「知的好奇心を喚起する授業が多いと感じている生徒(評価者 A)」の割合が増加するよう努め、また、その成果を学内外に積極的に発信していきたい。

## 2 関西大学北陽高等学校・北陽中学校【学校長名 鈴木 清士】

「2010年度学校評価報告書に対する校長の意見書」では、教師、保護者、生徒の3者によるアンケートの集計結果と同報告書を基にして、特に危惧される問題点を洗い出し、5つの改善策(1)～(5)を提示させていただいた。その後、それらを単年度で実行・完了すべきもの、数年にわたり継続・改善させていくものに分け、「関大北陽の中期ビジョン(2011年度～2014年度)」として、下記のように3つの柱をたてて整理した。

I 教育方針(ビジョン・教員の資質向上)に関わること

II 組織運営(分掌・学年・会議)に関わること

III 募集戦略(どんな子をとるか)に関わること

上記「中期ビジョン」は4月の運営委員会で説明し、続いて職員会議にて全教員に説明して、理解を求めるようにした(校長が教育のミッションとビジョンを説明し、教員に理解を求め到達目標を共有すること自体が今年度の改善策の一つでもある。別紙は職員会議で配付した資料である)。

続いて、法人および北陽の代表者で構成される運営専門委員会で説明をし、了承を頂いた。

さて、今回、4人の外部評価委員の方々から頂戴したご指摘をまとめると、以下のようになる。

- (1)「教育方針・教育目標」が教員間で徹底・浸透されていない。またこの項目は生徒の評価も低い。
- (2) 管理職と教員との連携、教員同士の連携が弱く、組織としての体制づくり、学力を向上させるための組織的な指導体制が十分にできていない。自己評価は毎年下がり続けている。
- (3) 基礎学力の定着、北陽の授業に対して多くの生徒は不安・不満に感じている。

以上のご指摘を受けて、「関大北陽の中期ビジョン」で示した改善策を改めて見直していったとき、特に今年度取り組むべき重要課題と思われるものを、以下に大きく2点にまとめることにしたい。

- (1)「組織の中における学習指導のシステム化」を図るため、共有化の改善を一つ一つ積み重ねていく。

2年目を迎えた「学習指導プロジェクト」のメンバーに学年主任を加え、さらに生徒の学習習慣、基礎学力の定着と学力の向上について改善案を提示する。

特に本年は学年、類ごとの教科指導の横の連携を強化する方策を探り、「生徒に何を学ばせるか」という大きな方向性を教員間で共有できるようにする。

- (2)「学校運営の組織化、機能化」を図るため、教員の意識改革を行っていく。

学校運営の組織化を、できるところから実行に移し、改善していく。まず今年は全員が何らかの分掌に入る。学年主任は生徒指導部および進路指導部と常に連携を図り、かつリーダーシップを発揮できるよう努める。

教員も「分掌と学年の両方の意識を常にもつ」ように意識改革を進めていく。

また会議はその論議の中味を重視しながらも、会議の時間短縮については全員が努力目標とする。

A 教育のビジョン

1. 関西大学へ進学する生徒の学力を伸ばしていく。（併設校としての使命を果たす）
2. 国立大学に進学する生徒を増やしていく。（保護者・生徒のニーズに応える）
3. 「人間力とさわやかさを持った生徒」を育てる。（北陽の歴史と伝統を継承する）

※ 人間力＝判断力、表現力、コミュニケーション能力

さわやかさ＝自ら考え実行し責任をもつ

「人間力」も「さわやかさ」も教師自らが培う努力をする。

4. 教員の資質を向上させるプランを管理職が設定する。

2011年度のプラン 「授業見学の実施」（新教頭提案）

従来の公開・研究授業のほかに、普段の授業を見学しあって互いに切磋琢磨をしながら教育力、授業力をつけていく。

B 学校運営（分掌・学年・会議）のビジョン

1. 学校運営の組織化を進める。そのために、
  - ①全員が分掌に入り、各自が分掌の中での役割を果たすことによって、分掌を機能化させる。
  - ②すべての議案は運営委員会に提出され、職員会議にしっかりとした形で提案できるよう、論を深める。
  - ③会議に参加するものが全員で協力して会議の時間の短縮を図る。  
どの会議も「最長 90 分、理想は 50 分以内を目指す」
2. とくに生徒の管理や指導に関わる場面では、
  - ①学年としてやらねばならないことを常に考え、積極的に学年全体で動く。
  - ②学年主任がリーダーシップを持ち、生徒指導部と進路指導部との連携を常にとっておく。

C 募集戦略のビジョン（2011年度）

1. I類とII類の五ツ木の成績基準をそれぞれ「59、55」に戻す。
2. 「スポーツ実績II類」の成績基準およびスポーツ実績を上げる。
3. 中学校の内申における副教科（4教科）も重視し、「意欲のある子」をとれるようにする。

D その他（2011年度の新たな2つのプロジェクト）

I 2013年度コース改編のビジョン

「2013プロジェクト」を立ち上げ、新しいコースに対応するプランを練る。

・募集戦略の策定    ・カリキュラムの策定    ・スポーツコースの中味の検討

II 新体育館建設のビジョン

「体育館建替えプロジェクト」を立ち上げ、2013年の夏に建替えを目指す。

### 3 関西大学高等部・中等部【学校長名 米津 俊司】

学校開設1年目の学校経営等に関し、多くのご意見・ご提言をいただき感謝している。開校2年目の2011年度は、中等部生221名、高等部生264名、総数485名という規模になり、学校は活気に満ちている。委員の皆様から頂戴した意見を「学校の組織運営に関する事項」と「教育内容（学力向上）に関する事項」に分け、所見及び改善策について述べ、今後の学校経営に活かしてまいりたい。

#### (1) 学校の組織運営に関して

会議の効率的な運営や情報提供、学校間連携、校内研修などについては、開校1年目は試行錯誤しながら運営してきた側面もあるが、本年度は教職員も増え、校務分掌、会議の設定などの改善を行っている。また、各組織（各部及び学年）の権限と責任を明確にし、教職員の学校経営への参画意識を高めるように努めている。

例えば、機能的な学校運営を行うため、戦略会議、中等部・高等部企画会議を新たに設け、校務運営委員会で方針や運営事項を協議決定し、職員会議で共通認識を図り、各部会議、担任者会、教科会議等で具体的な教育活動を実施する体制づくりを行い、昨年度よりスムーズな運営がなされるよう改善を進めている。

情報の提供については、HP、学校だよりのほかに、保護者対象のメール発信システムを導入し、適切な情報を速やかに提供できるよう改善に努めたい。

学校間連携については、まず一貫校として初・中・高等部のスムーズな接続を実現するシステムづくりが喫緊の課題である。本年度は初等部と中等部の間で接続会議を設置することとしている。中等部・高等部の教員は同じ職員室におり、学校運営は中高一貫で行っているが、学力向上策など個々の課題を共有し具体的な取組を進展させる体制づくりに努めている。

教員研修については、昨年度不十分であった反省にたち、本年度は、授業力向上、進路指導、情報、生徒指導などの校内研修を実施するとともに、外部での研修に積極的に参加できる体制をつくり、改善を図っている。なお、高等部では毎日7時間授業を実施しており、会議や研修は午後4時45分以降の開催となっているが、この点の工夫改善も必要であると考えている。

また、関西大学の建学の精神や教育理念の涵養が重要であるとの指摘をいただいた。学校説明会、入試説明会で詳しく説明しており一定の理解を得ているが、千里山キャンパス訪問、高大接続の取組で、大学の先生の授業参加や大学院生の学習支援などの取組を充実させ、関大生としての帰属意識の高揚を図り、関西大学進学へのモチベーション向上に繋げたい。

#### (2) 教育内容（学力向上）に関して

学力向上の組織的な取組について、生徒の期待や夢が大きいほど、現実に対する評価は厳しくなるが、このギャップを埋める取組が今後の学校づくりの課題であるとの意見をいただいた。この点が本校においての大きな課題なので改善策について述べておきたい。中等部と高等部では学習内容の質や量は異なるが、中高6年間の中でいかに学力を向上させるかがポイントであり、まず、そのための枠組みづくりが必要であると考え、高等部では3学級を4学級に分割し少人数授業を可能にし、併せて希望する進路を踏まえ文系理系の学級編制を行い、習熟に合わせた授業方法も取り入れるなど改善している。中等部では、自学自習の力をつけるため、自主学習用の課題設定や放課後補

習、テスト前一斉学習などを実施している。また、習熟に開きのある教科については、習熟に合わせた授業展開も実施するよう改善する予定である。

また、昨年度同様、教育計画と併せ、保護者にもシラバスを配付し、学習や進路に関する生徒、保護者対象の説明会、研修会を実施する。

さらに、定期テストに加え、学習状況調査（中等部）や学力テスト（高等部）を実施し、学力の状況を把握し、生徒、保護者との懇談を持つなどにより学習意欲を向上させる取組も充実させたいと考えている。

#### 4 関西大学初等部【学校長名 田中 明文】

創設初年度の学校として、多くの貴重なご意見を頂き感謝している。大きくは組織運営に関する事項、教育課程に関する事項に分別できると考えている。

今年度は、専任教諭、非常勤講師合わせ 13 名の増があり、昨年度の倍近い人数となった。この戦力を梃子に改善を図っていきたい。

##### (1) 組織運営に関して

教員増を受け、校内組織を昨年よりも細分化し、教員一人に係る校務の負担を軽減すると同時に、各組織において立案・協議等の時間を十分にとりたい。

昨年度の緊張感と慌ただしさに比べ、時間的、精神的な余裕を生むことができ、意思疎通の弱さや理解不足等の課題がかなり改善できると考えている。また各組織に権限と責任を常に意識させ、積極的な活動に結びつけたい。例えば、昨年度は生活指導と安全指導が一体であったが今年度は分割し、生活指導については、最も大きな課題である登下校の安全指導も所管させ、交通ルールやマナー、そして危機対応の方法についての指導の徹底を図りたい。また、安全指導については安全管理とし、暴風雨時等の異常気象対応や各種避難訓練の実施だけでなく、入学式や保護者会等の学校行事における安全管理の在り方についても考えさせたい。

新設校として早急に学校体制を整えるために重点項目が多く、今年度も項目を若干増やさざるを得ないこともあるが、昨年度の状況をしっかり踏まえた上で新しい課題にも対処したい。なお、重点項目については、来年度以降は数を増やすのではなく内容の深化を図る方向へ考えていきたい。ご指摘頂いた重点項目の評価については、評価観点の作成時において項目との関係ができるだけ明確になるように努力したいと考えている。

HPの情報発信についても昨年度は滞ることがあったが、今年度は毎週更新を目標としている。また、入学試験については、昨年度から管理職が受験者全員への面接を実施し、同一観点で入学者レベルの統一化を図ることにしており、今年度もこれを継続する予定である。

##### (2) 教育課程に関して

昨年度、9月後半から10月に集中していた運動会、文化祭、入学試験の時期を見直し、運動会を6月、文化祭を11月に設定することにした。行事の集中が教員間の連携にも影響を与えるところがあったが、これによってある程度余裕をもった教育課程ができると考えている。特に文化祭についてはクラブ活動発表や合唱、図工作品展なども予定しており、児童一人ひとりの居場所づくりに役立つと考えている。また、最高学年が4年生ではあるが、クラブ活動だけでなく委員会活動も導入することにし、自由や自主性とともに関係や周りを大切にする校風を育てていきたい。

中等部・高等部との運動会、文化祭については、各学校の規模が拡大し、同一日実施は困難と考え異なる開催日とする。ただ、運動会では中等部・高等部とのコラボ競技を設定し、文化祭についても中等部の発表会を見学するなど、今後も良き連携を残していきたい。また、中等部とのカリキュラム連携については、カリキュラム委員会を校務分掌に明確に位置づけ、一層の充実を図りたい。

昨年度実施したシラバスの作成、家庭配付については、保護者への約束として今年度も行い、また、在籍児童の学力差問題については、これまでの放課後指導と並行して、今年度は教員増を得て

家庭学習の成果を丁寧に評価するなど力を入れたい。さらに、関西大学への帰属意識の醸成としては、本学発祥地への遠足や4年生の社会科に大学創設関連の単元を設定するなど、徐々に意識の高揚を図っていききたい。

本校の特色については、まず学習内容として12年一貫教育を支える思考力を育成するためのカリキュラム（ミューズ学習）を構成していることと考えており、これは中等部では「考える科」、高等部では「プロジェクト学習」へと繋がっている。教員研修も思考力育成の研究をテーマにしており、全教員の共通理解のもとに今年度も推進していく予定である。また、1年生からの英語学習や、この英語学習を生かした国際交流、さらに、自然・社会・体育・言語研修等の宿泊体験学習の実施・計画など、本学の教育理念である「学の実化」の精神を基盤とした教育を行っている。今後も特色ある教育を進めるとともに、その発信に努めていきたい。

## 5 関西大学幼稚園【園長名 石倉 千世】

2008 年度より 3 年計画で取り組んできた学校評価（自己評価）を今年度で一巡させることができた。2008 年度は本園の概要を提示し自己点検・評価を行い、2009・2010 年度は、2009 年 5 月に作成した関西大学幼稚園自己点検・評価項目一覧をもとに、項目を前半と後半に分け、教育上の意義や教員の保育姿勢を具体的に加え、保育の在り方について自己点検・評価に取り組んだ。

本年度の 5 項目「給食・弁当について」「通園について」「子育て支援について」「関西大学初等部との接続について」「施設・設備について」に関しては、保護者の関わる部分が大きいため関心度が高いものと考え、また教員との意識のずれが生じていないかという視点から分析ができるアンケート調査を試みた。

その結果、外部評価委員の方から「92%近い有効回答を得られたことは、日常的な保護者との望ましい関係なしには達成できない」と評価を頂いた。また、5 項目の詳細な記述を通して、「伸びやかな成長を促すようきめ細かで温かい教育的営為が展開されていることが確認できた」との評価は、私たちが何よりも強いこだわりを持って取り組んでいる保育の在り方であるので、非常に励まされた。今後も評価委員の皆様のご指摘を受けながら期待に応えられるよう、教員の資質の向上に努め、保護者との連携を密にした幼児教育を実践していきたいと思う。

さて、いくつかのご指摘や課題に関しての所見・改善策を以下にまとめて記載させて頂くことにする。

### <給食・弁当について>

毎週木曜日に実施している園内の研究会の議題に 2011 年度は「食育」に関することを挙げており、教員全員が問題意識を持ち共通理解に努めている。また、「食育だより（仮称）」を年 6 回発行し、季節や必要な時期を考慮して保護者に効果的な働きかけをすることを計画している。

### <通園について>

「通園だより」を発行しているが、子どもの成長・変化の様子や、具体的な子どもへの指導（安全・マナー・ルール）を分かりやすく知らせることで、教育的意義が浸透するよう内容に工夫をする。

### <子育て支援について>

「希望（のぞみ）クラスについて」のアンケートの中で、希望クラスの在り方は子育て支援のために有効かに関する回答のうち、保護者の 3 割以上が C・D と回答していることについての分析がなされていないのでここで申し添えさせて頂きたい。

希望クラスに入室希望する者全員を受け入れることができない現状に対し、または、保護者の都合で子どもを預けることができない形態に対し、“子育て支援”を実感できないものと考えられる。現在在園している母親自身の要望は十分理解できるが、現時点においては保護者の要望に応えることを優先するより、子どもの置かれている環境を良くするために考えた希望（のぞみ）クラスであるので、子どもを中心に置いた考え方が、ひいては保護者の子育て支援に繋がるものでありたいと考えている。

### <関西大学初等部との連携について>

ご指摘の通り、教員に早期のうちに進路選択を強いることへの戸惑いがあることは否めない。また、保護者に対し、先の初等教育に重点をおくあまり幼児教育で養わねばならないことが空洞化してしまうことへの懸念があり、園内部で話し合いを進めている。

これと並行して、2010年度3月には教員数名で初等部1年生の授業を、2011年度4月には全教員で1・2年生の授業を実際に参観し、初等部の教育内容・方法を共有する機会を得た。また、6月には1・2年生担任の教員との懇談会を計画しており、引き続き初等部教員との交流を深め、連携を進めているところである。

<周年記念行事について>

関西大学幼稚園は今年度4月から創立して61年目を歩み始めている。周年行事としての取組は満60年を終えた時点で取り組み、11月には記念式典・記念講演会・子どもまつり等を計画している。

## 外部評価委員会規程

制定 平成21年1月29日

(設置)

第1条 学校法人関西大学における自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、学外有識者による評価を行い、その意見を自己点検・評価活動に反映させることを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 常務理事 1名
- (2) 理事長が委嘱する学外有識者 4名程度

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、委員会を代表し、その業務を統括する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、委員長の職務を代行する。

(委員長及び副委員長の選任)

第4条 委員長は、第2条第1号に規定する委員をもって充てる。

- 2 副委員長は、委員長が指名する。

(委員の任期)

第5条 第2条第1号の委員の任期は、役職在任中とする。

- 2 第2条第2号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 前項の委員に欠員が生じたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は、前任者の残任期間とする。

(職掌事項)

第6条 委員会は、学校法人関西大学自己点検・評価委員会が行う自己点検・評価活動に関する評価を行う。

- 2 委員会は、前項の評価の結果を学校法人関西大学自己点検・評価委員会に報告する。

(運営方法)

第7条 委員会は、委員長が必要と認めたとき又は委員3名以上の要求があったとき委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の過半数の同意をもって決する。
- 3 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求めることができる。
- 4 委員会は、審議のため必要があるときは、関係部署に対して資料の提出を求めることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、点検・評価推進グループが行う。

(補則)

第9条 このほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の議を経て定める。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程（改正）は、平成22年4月1日から施行する。